

第四回全国研究会議を振り返って

## 福音と文化——総括の試み

コーディネータ

橋本昭夫  
石黒則年

「福音と文化」という問題意識は、教会の「実践」の現場から起ってきたものである。わけでも、「日本」という文化的実体の脈絡において、福音がどのような受容あるいは排斥を経験しているのか、どうすれば福音がその中に浸透していくことができ、それを救うことができるのか、そういう「実践」の現場から問われているのである。断わるまでもないが、ここで言う「実践」とは、なにか学問的なそれに比較して低次のものを言うのではない。人間の現実の存在にかかわること、それが「実践的」ということの意味である。古くから神学が実践的な学問 (Theologia practica) であるといわれるゆえんがここにある。また今日、実践神学が神学の各科目を総合するものであるとされるのも、深い理由があると言わねばならない。すべての神学的いとなみは、神の言葉の宣教という実践に集中するからであるとも言える。

ところで「福音と文化」という二つの概念の並置は、相互に輪郭の明確な事柄の関係を示唆しているように見える。しかし、文化とは(とりあえず)人間の霊的本質に起因する言語、価値、倫理、世界観などを含む精神現象の統体であるとするとき、ほどなくこの二つはたがいに密接に入りこんでいることがわかる。福音(およびその旧約的前

提)は特定の時代の文化を器として歴史に現実化した。文化的真空のなかでもたらされたものではなかったのである。反面、福音はまた人類史における文化形成の枢要な動力になったことも疑いえない。福音は文化に担われていながら、文化を超越した逆に、文化は福音によって触発され(すくなくとも部分的には)形成の契機を福音においていながら、しかも福音に對立し、それによってたえず批判される必要をもつように見える。「福音と文化」の二義性を、いかなる本質をもつものとして同定し、明確化していくか、そこに今後の、福音主義の立場からの文化、とくに「日本文化」にたいする接近の出発点が求められねばならないように思われる。

今回の研究会議のねらいは、まず「福音と文化」の關係に横たわる問題の本質をまず認識しよう、というものである。福音主義神学の陣営におけるこの問題にたいする学問的(客觀的)をアプローチの端緒としたいというのが準備委員会・コーディネータの意図である。文化のもつ正負に具体的にどう対応していくかは今後の課題となろう。

そのような意図に基づき、発題の最初を「導入・福音と文化」というテーマのもと、問題の領域の鳥瞰図とも言うべきものを置き、また発題の最後を「福音と文化・方向の模索」として今後の展開の示唆となるようなものとした。そしてこの二つの大きな括弧の間に、とくに日本文化と福音との出会いを歴史的にあとづけたという意図で「日本キリスト教史における福音と文化」、そして歴史的交渉の中にもみられかつ現代日本の宗教性を特徴づけるとされる「日本教を吟味」するテーマを配置した。それらは、福音と文化の關係を歴史的に、また福音を迎える精神的現実を認識したいという願いの現れである。さらに、文化の問題をさらに深め、とくにその宗教的根底をさぐって見なければという必要から、「文化の母体としての他宗教の問題」をとりあげられた。かつ、それに続いて、宗教的要素と不可分に結び付いている習慣・習俗と福音との折衝を、てきぐりで行われている宣教の現場から、討議検討するパネル・ディスカッションが設けられた。すでに、いわば「見切り発車」的に行われている、習慣・習俗のキリスト教化は果たして神学的に妥当なものか、重大な結末を孕んではいないかを現場から素材を土台に検討したいと考えたからである。

「福音と文化」の關係の認識が(いくぶんなりとも)得られ、それをどのように評価すべきであるかを考えるとき、その問題が聖書においてどのように現れ、それがどう評価され取り扱われているかの問いへと促される。旧約も新約もともに、唯一神信仰・福音信仰とそれぞれ異なる文化的現実と接触をもっている。それぞれに、明確な言葉で表現されていないにしても、事柄はそこにある。そして、それに「対処」している信仰のありかたがこの問題に光を投げかけるはずであるとの期待を持つのは当然である。よしそれがわれわれの現実の脈絡において、われわれ自身によって具体化されねばならない原理的なものとどまるにしても。

以下のコーディネータによる発題の紹介とコメントは、総括の一試みである。読み違え、理解の浅さ、また統括的視点をまとめるための力量の不足などは容赦を乞うほかない。敬語を省かせていただいた。文責は橋本にある。

小野氏の発題は、日本キリスト教史における福音と文化の關係が在来の宗教思想との交渉、また近代という激動の時代の中で形成されてきたという事情を反映して、きわめて複雑な様相を呈していることの指摘から始まり、「近代化過程」、「自己同一化の危機」、「文化からの後退」の歴史背景にそって「福音と文化」の關係を描きだしている。そこにおいて在来思想の止場として福音をとらえていくという姿勢が見られるが、それはやがて、新しい実存原理として福音を受容しながらも、従来の宗教・思想、総じて文化そのものが現実性の壁に直面し、日本文化と福音の総合による自己同一性の模索という展開をとっていく。そして「自我」の問題の先鋭化するなかで、福音が個人化(私事化)していき、文化形成の動力としての性格を失っていく。しかしそれが結果的には、批判能力の喪失となり、伝統文化への埋没となっていく。文化の無批判的肯定も、またそれよりの逃走もともに福音が文化に飲み込まれるという歴史

的経験のあとづけがなされている。そして、小野氏の発題の中で、日本のキリスト教がその歴史において経験した落とし穴は、日本文化の「表層」における諸現象には注意もし、敏感な対応をしてきたが、「基層」のそれには足を取られてきた、という指摘はきわめて重要であると思われる。

ところで、小野氏の指摘になる「古代から現代に一貫して流れる、基層文化（基層信仰）」とは、宇佐神氏の発題テーマである「日本教」と一応呼ばれているものではないか。「日本教の世界は二人称の世界」と規定されるように、そこでの社会形成原理は人間相互の分に応じたあり方・ふるまいによる和の世界であり、人間が相互に規制しあう人間内在的規律によって営まれて世界である。ここでは、「無限に開かれた人格」が超越者の介入によって内面的に形成されるという可能性は埋没する。この日本教の世界では、和という至上命令のもとに、すべてが一元化され、異分子の排斥が必然的なものとなる。宇佐神氏は、この日本教世界においては体制維持に結び付く「特定の経験」、特定の価値のみが評価され、受容されると指摘する。その裏は、ある外的原理が体制を批判し、その改革を意図するというよりも、むしろ日本教的世界というものが自己の同一性を頑強に保ちつつ、外来の諸価値を取捨選択的に吸収同化していくことであろう。しかも、それが「天皇制」によって統合されている世界である。この発題において、宇佐神氏はフロイトの精神分析のカテゴリーを用い、日本民族が、封建体制の確立期に「精神的自由の息の根をとめ」られ、真の人格的成熟を妨げられて今日にいたっている、しかも真実な人格的交わりを形成し、人格的成熟にもとづく愛の共同体の形成には福音以外になく、それを通してこそ、「真に信頼にみちた日本の社会と文化を形成」する道があるとの、興味深いアプローチを試みている。

稲垣氏の発題は、宇佐神氏が「日本教的世界」と呼んでいるものを、その宗教的側面から掘り下げようとするものである。稲垣氏はそれを「日本主義」と用語をあてている。宇佐神氏が、人格的成熟という人間のいわば内面的側面にとくに光をあてているのにたいし、稲垣氏は「イエ、ムラ、クニ」という外面的・共同体的な面にアプローチをしている。しかもこの共同体が「自然的宗教集団」として性格をもち、その構成要素は神観的に現世内アニミズム、人間関係においては主客未分の集団主義、その自然観は有機的・進化論的なものであると指摘される。そして、これらは「基層宗教感情」としての祖先崇拜によって統合されて、「日本主義」という文化的・宗教的現実を現出している」と指摘されている。稲垣氏の発題においても、「日本主義」における「天皇制」のもつ宗教的・文化的意味が重視されており、天皇は新憲法において「象徴」とされているが、シャーマニズムの生き神信仰の実質はそこにあり、国家神道の枠を潜在的に提供している。ここにおいて、内に向かっては「個の確立は疎外され」、外に対しては「均質かつ閉鎖的集団の形成」が顕著となり、超越的な批判原理をもつキリスト教との対立が必至となる。稲垣氏は、「ポスト近代の『日本主義』」という標題において、「日本主義」はポスト近代においてもタフな生命力をもつ文化的・宗教的現実であるとの観察をにかけている。そして氏の意図は、異教主義としての日本主義の構造を明らかにすることに向けられている。「宣教とは文化の根底にある世界観の対決」という主張に立ちつつ、かつて日本にも「天理ほんみち」に見られるような現世内肯定主義を否定する論理のあったことを引きつつ、今後、福音主義神学からの作業として、「日本主義」あるいは「日本教」に対する宗教批判の視座を確立すべきこと、そして日本主義のもう一つの選択として「霊的共同体理論」を教会論的に展開すべきこと、このような脈絡において「聖書のメッセージ」の現代的解釈の試みられねばならないことが提言されている。

「福音の宣教が文化にどう対処すべきか」は、その学的解決を待つことのできない、「いま・ここで」いやおうなく対応していかねばならない宣教論的日常である。教会は、すでに日本の伝統的習慣・習俗（それは「基層の宗教感情」の表出と言えよう）と関わっている。元旦礼拝、召天者記念会、幼児祝福式などはその例である。山口氏の構成

になる、パネル・ディスカッションは、「宣教と文化のかかわり」をいわばフィールドの実際から検討していくようにするものである。山口氏は、その導入において、習慣・習俗にたいし、一義的な「あれか・これか」で割り切れないのが、現場での「実感なのである」と指摘する。第三の道の模索がこのパネル・ディスカッションがねらいである。興味深いのは、伝統的習慣・習俗がキリスト教の宣教に新しい形を求めるといふ面だけではなく、逆にキリスト教的な習慣が日本文化に浸透し、その一部となるという場合も考えねばならぬという観察である。クリスマスがその典型である。問題は、伝統的習慣・習俗を、宣教論的プラグマティズムで無批判に「洗礼」をさすけてもよいのかどうか、また逆に「日本文化」の一部となるまでに吸収同化されたキリスト教的習慣を手ばなしで歓迎してよいのかどうか、という点である。また「地藏盆」のような日常から区別された聖なるとき、「祭り」の必要を、宣教論的にどう考えるべきか。このような具体的な宣教の場でのさまざまな試みは、「福音と文化の関わり」を学的に検討していくために不可欠な素材を提供してくれるものと期待される。

「福音と文化」の問題は、時空のちがいを超越する普遍的なものである。それは旧約また新約においてもきわめてアクチュアルな主題であったといえる。旧新約の時代におけるこの問題の現れとそれにたいする預言者・使徒的対応は、今日この主題を考える上でも規範的な意味をもつものである。(ただ旧約を考えるとき、用語をいくぶん厳密にして、「啓示と文化」と言うように一般化すべきかも知れない。)服部氏は、旧約聖書からの発題において、その冒頭から、聖書記述は歴史的、すなわち具体的な歴史の状況の中で生まれ、しかもその状況を内容の一部としているのであるから、文化的要素を必然的に内包しているとの観点に立つ。この側面を軽視(あるいは無視)して、聖書の使信を読み取ろうとする態度は、「非福音主義的聖書観に陥る危険に直面する」との警告がなされる。文化は啓示と不可分の関係にあり、前者は後者の器ともいふべき性格をもつものである。そしてイスラエルは、その歴史において、異

教文化と接触していかねばならない聖定的必然性のもとにあるとさえ言われる。と同時に、その中において、選民として独自の道を歩むというもう一つの聖定的運命のもとに置かれている。以上のような観点から、旧約文書の諸カテゴリーにおける啓示的信仰と異教文化の接触のさまざまな例が検証され、その歴史における異教文化(とくにカナン(のそれ)との接触の経緯と悲劇的な結末がたどられる。服部氏は、異教的文化にたいし、啓示信仰が見せている対応は、それに埋没・自己の同一性の喪失に陥らぬよう警戒する「護教的」側面が一方にあり、他方、異教文化に積極的に対応し、逆にそれを教化しようとする「宣教的」側面がある、と見る。この二つの側面の緊張こそ、旧約における啓示信仰と文化の関係を決定づけている。この緊張は、当然のことながら動的なものであって、静的な定式によって解消されえぬものである。「神の導き(聖霊の授け)」「こそ、この二つの間を生きていかねばならぬ歴史的現実において、道を誤ることなく進ましめるものである。

それでは新約においては、事柄はどのように展開しているのだろうか。内田氏の発題によれば、新約においても福音が文化を肯定する面と、それを否定する面の二つがあり、「福音と文化」は「逆説的な関係」にある。み子の受肉が特定の歴史的状況の中に生じたという事実が、文化の肯定を意味する。そしてこの事実を証言する「新約聖書の全体」が、福音がある特定の文化群に働きかけ、影響を及ぼした結果であると見られている。しかし、福音がある文化の枠の中で生じたとしても、その文化の構造にそのまま同化吸収されたわけではない。そのただ中において、それに挑戦し、内面からつくり変えるという否定面を福音はもっているのである。内田氏は、このような基本的観察に立ちつつ、新約諸書の背景であるパレスチナ、散在のユダヤ人、およびギリシャ・ローマ世界のそれぞれの文化を紹介しつつ、それらが思想的、言語的、交易的などの面で、福音の世界伝搬の担い手となった事実を見ていく。さらに福音が、具体的に語られるとき、そしてそれに従って生きられるとき、所与の文化の素材の衣裳をまとう。その意

味では、文化の「制約」のもとにあると言わねばならない。いわゆる「接点」(Anknüpfungspunkt)とはこのことを言うからである。しかし福音は、そのような枠を流動化していった事実も見逃すことができない。ここにも肯定面と否定面の逆説的關係が見られる。この基本的構造は、イエスご自身にも、初代教会にも、また異邦人キリスト者の場合にも、それぞれの文化的脈絡における態度に一貫して見られる。一面文化に対して肯定的である。それゆえ既存の体制を是認するような傾向が見られ、革命的ラディカリズムを事実上否定する、しかし他面この世界の権威を根底から相対化し、その体制の内側から確実に変革していく、そのような「逆説性」が、新約の共観、ヨハネ、パウロの各文書にそれぞれの形で一貫して流れている。「この世にあるが、この世のものではない」という言葉が端的にこの事態を表現している。内田氏はこの福音と文化の關係の「逆説的性格」は、文化の二義的な現実から由来する。文化は神の創造につながるものであるゆえ肯定される、しかしそれは罪の腐敗のもとにあつて自らを「絶対化・神格化」する傾向を不断におびえているゆえ否定されねばならない、のである。福音と文化の關係の相は新約においても、二面性を持つものであるということが判明する。

現代日本の宗教的・思想的状況のなかにおける「福音と文化」の問題を歴史的に、現代思想として、また宣教論的に研究し、さらに旧新約の示唆を検討して与えられた洞察は、今後どのような方向に展開されるべきであろうか。佐布氏の発題は、その方向をさぐるうとするものである。文化という現象の理解の試みにはじまり、「福音と文化」が論じられる際の留意点が述べられる。つまり、この問題が意識されるのは、第一に文化の担い手である個人が福音を受容するときであり、第二にホスト文化が福音を拒絶し対立する場合であり、第三に福音も特定の文化に担われていくという事実そのものからである、ということである。さらに日本文化と福音との交渉が歴史の流れに沿ってとらえられる。十六世紀中葉、十九世紀終葉に始まった日本文化によるキリスト教(前者はカトリック、後者はプロテスタント)の受容も、ともに「根づく間もなく」いわば異端思想として排斥される。そして第三の交渉として、現代があげられる。福音は「日本の既成の文化にどのように根を下ろすかが問われるようになった」と指摘される。その方向はどのようなものであろうか。佐布氏は、「特定の文化にたいする福音の浸透」という命題のもとに、三方向を示唆する。第一は、福音も文化も個人によって担われるゆえ、それら双方の担い手となる信徒の育成、第二はキリスト教文化活動の積極的推進、第三はみ子の受肉にならつて特定(われわれの場合、日本)の文化への福音の同一化をはかる、である。この示唆において、佐布氏は福音と文化の必然的な結び付きを前提に、福音の文化への浸透を意図しているように見える。それは、内に浸透し、そのホスト文化を福音の有能な車輪(vehicle)と化していくということではないか。

以上の発題によって浮かび上がったことは何であろうか。それはあるいは三点にしばることができるかも知れない。第一点は、文化と福音は複雑な相互關係にあるということである。福音は文化によって担われ、文化は福音によって触発されて自己をあらたに形成する。第二点は、しかし文化は自己の同一性・自足性を求め、福音を吸収同化しようとする衝動に傾く。それによって福音を形骸化しようとする。そして自己とことなる異質的要素にたいし拒否的・敵対的態度をとる。それは必ずしも、異教的文化でのごとくだけではないであろう。いわゆるキリスト教的文化のなかにおいても同様である。第三点は、福音は既存の文化を批判しつつ、その文化が神の創造と救済のみ旨により沿ったものとなるべく、積極的に文化形成に寄与していく。しかし、文化は神の似像としての人間が、その罪の支配のもとにおいて形成していく人間のわざであるかぎり、そこには救済はない。文化は、よしどのように整えられようとも、福音と重なりあうことは此岸においてはないのである。福音の文化へのとりくみは、福音の不断の課題であるように見える。そしてその課題は、日本という「根を腐らす泥沼」と言われるような正体の曖昧な文化的状況にお

いては一層の困難を極める。その根底から洗いなおさねばならない時が来ているのである。そして、今後の福音の文化（とくに日本文化）への対応の道は、その日その日、上より与えられる「マナ」のアナロジーで考えることができるかも知れない。

多忙のなか、研究会議場へ足を運び、熱心に討議に加わってくださった方々に、また発題講演や、この度の学会誌には様々の制約によって内容を掲載できなかったパネルディスカッションでの奉仕を快くひきうけて下さった方々に、心からの感謝を申しあげたい。「福音と文化」という広大なテーマが、つづいて各地で催される研究会などで取り上げられるようになるとすれば、この度のコーディネーターの任は解かれたと見てよいであろう。